

## 東日本大震災から学ぶ、防災教育の実態とあり方 ～福島と徳島における放射線教育についての調査報告を含めて～

小野覚久<sup>2</sup>・村中貴恵<sup>2</sup>・伊槻 悟<sup>2</sup>・井上翔太<sup>2</sup>・小林大起<sup>2</sup>・都築弘充<sup>2</sup>・森健太朗<sup>2</sup>・  
大岩由利恵<sup>2</sup>・坂本和歌子<sup>2</sup>・山田真理<sup>2</sup>・高橋直樹<sup>2</sup>・渡邊凌<sup>2</sup>・佐藤高則<sup>1</sup>・山本真由美<sup>1</sup>・  
中山信太郎<sup>1</sup>

(<sup>1</sup> 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部、<sup>2</sup> 徳島大学大学院総合科学教育部)

### 1. はじめに

東日本大震災からまもなく5年を迎えようとする中、被災地域では様々な復興支援活動が行われている。しかし、福島県においては、他の地域と違い、原子力災害とそれに伴う風評という特有の問題が、いまだ地域住民の不安・不信を依然として高めている。

徳島大学大学院プロジェクト研究Ⅰ（中山班）では、昨年に引き続き福島県の地域住民への支援活動を目的としたプロジェクトを実行しており、徳島大学の福島支援プロジェクト（リーダー：中山信太郎）と連動する形で、大学院生参加型の様々な活動を行ってきた。

また、今年度は前年度の活動に加え、今後予想される南海トラフ大地震での災害に対して、福島での震災の経験を、徳島での防災や減災に活かさないかという課題に取り組むこととした。

本発表では、それらの活動の中から、福島県白河市で実施された学校教員対象の放射線に関するアンケート調査と、徳島市の公立小学校の教職員に対するアンケート調査結果の比較と、白河市での子どもたちへの運動・発育教育の活動報告や保育士、幼稚園教諭の捉えた白河市の子どもに対する課題と対応についての結果報告、また南海トラフ大地震などの大災害時に、徳島の市民の命を守るため、どのような防災・減災対策を考えたらよいかというテーマで企画したシンポジウムの報告を行う。

### 2. 運動・発育教育（2014年6月～随時）

昨年度に引き続き、福島県白河市において、運動・発育教育を行った。福島では子どもの外遊びの制限が課される状況は改善されたが、子どもの健やかな発育・発達を考える上で、必要な発育発達が阻害された時期がある可能性が考えられる。今年度も、子どもたちの身のこなしや普段の行動において、問題を抱える子どもが5歳児クラスに多くみられる状況があることが、白河市の保育士や幼稚園教諭からの聞き取り調査でも確認されている。そのような状況に対し、本プロジェクトでは、徳島大学の荒木秀夫教授の提唱する運動理論に基づく、人間の基本的な動きを中心に構成したコーディネーショントレーニングを行い、「少しの練習で子どもの動きや感性の変わる」トレーニングプログラムを作成した。

すぐに取り入れることの出来る単純な運動で、かつ継続支援が可能な運動・発育教育の活動を継続した。大学院生の小野と高橋の主導で、白河市の複数の幼稚園、保育園、小学校等において、プログラムを実施した。



Figure1  
幼児に実技指導を行う  
高橋

### 3. 教職員へのアンケート

白河市の教員を対象とした2015.8月のアンケート調査を比較検証するため、徳島市教育委員会

等の協力を得て、徳島市立小学校教員へのアンケートを実施した。アンケートの実施は、昨年度末に各学校ごとに依頼し、実施日については、各学校の任意の日程により行った。今回は福島県白河市でのアンケートと徳島市でのアンケート結果をもとに、現状の把握と今後の課題について検証した。大学院生の渡邊と伊槻の主導で実施し、渡邊、伊槻、村中が主導で分析を行った。

### 実施目的・方法

放射線に関する知識と、風評に関する意識の調査  
調査対象

- ・福島県：小中学校教諭(計 278 名)
- ・徳島県：小学校教諭(計 403 名)

### 3-1. 回答者の基本情報

回答者数は、福島で 278 名、徳島で 403 名で、性別は、福島で男性 112 名、女性 160 名、不明 6 名、徳島で男性 122 名、女性 267 名、不明 14 名であった。回答者の年齢を Table1 に示す。回答者は、地域間の比較のため、学校教員とした。

Table1 回答者および年齢

	20代	30代	40代	50代	60代	無回答	合計
徳島	59	51	85	190	14	4	403(人)
福島	40	49	99	87	2	1	278(人)

### 3-2. 放射線に対する関心

放射線に対して関心があるかについて、①と⑤もある～⑤全くないの 5 件法で尋ねた(Table2)。

今年度は、徳島においても小中学校教員に対してアンケートを実施したことから、この項目での福島と徳島での差は大きくはなかった。

Table 2 放射線に関する興味

興味	とてもある	少しある	どちらとも いえない	あまりない	全くない	無回答
福島	32.0	56.8	5.4	5.8	0.0	0.0(%)
徳島	18.4	64.0	11.2	4.0	0.0	2.5(%)

### 3-3. 放射線に関する知識

放射線に関する知識を調べる 4 つの質問への回答を求めた (Table3)。各質問に対し、福島に比べ、徳島の正答率が低く、特に 2、4 の質問に対して正答率が低かった。3-2 において、福島と徳島での関心の差はあまり見られないと思われたが、4 の質問に対しては徳島でわからないを選択する率が高かったことから、放射線に関する関心の低さが知識に影響したのではないかと考

えられた。

Table3 放射線に関する知識の正答率と不正答率

	正答率		不正答率		わからない	
	福島	徳島	福島	徳島	福島	徳島
1. 天然の自然放射線による被ばくはあると思いますか? (①ある ②ない ③わからない)	70.9	51.1	20.1	17.4	9.0	29.3
2. 体に入り込んだ放射性物質は、ずっと体内に蓄積すると思いますか? (①積る ②積らない ③わからない)	57.2	15.4	25.5	58.8	16.5	23.8
3. 人が受ける被ばく量を減らす方法は、1つだけOを付けてください。 (①ベクレル(Bq) ②グレイ(Gy) ③シーベルト(Sv))	76.3	54.1	23.7	45.9		
4. 食品内の放射線量の基準値は、1つだけOを付けてください。 (①1000Bq/kg未満 ②6000Bq/kg未満 ③わからない)	59.7	25.5	11.9	6.3	27.0	66.8

## 4. 防災シンポジウム

今年度の主な活動として、福島をはじめとする東日本大震災での経験を、徳島の防災や減災に活かすことができないかという課題を設定した。そこで、シンポジウムという形で徳島大学の学生や地域の方々の防災意識を高め、南海トラフ大地震などの災害発生時に、一人でも多くの人々を救うためにはどうしたらよいかという意識とそのための知識を身に付けさせる工夫を考えた。

シンポジウム (2015. 11. 15) 内容

### (1) 基調講演

- ① 東日本大震災における地震津波経験者による講演
- ② 防災センター教授による講演
- ③ 防災士・弁護士による災害への備えについての講演

### (2) パネルディスカッション

設定は、徳島大学常三島キャンパスけやきホールにて、大地震発生、津波警報が発令された際の行動について考える。

フロアでのクイズ形式のアンケートをもとに基調講演の 3 名と日本赤十字社徳島県支部の職員によるディスカッションを行う。

## 5. まとめ

本プロジェクトでは、大学院生教育の一環として、プロジェクト研究 I の受講生が各々の専門を活かすとともに、今年度は特に昨年度からの成果を引き継ぐ形で活動に従事した。大学院生にとって、今回の活動を通して被災地の現状をもとに、徳島での防災・減災に活かす活動を行ったことは、各々の専門性を伸ばし、地域に貢献できる人材の育成の機会になったといえる。